

第51回労働リーダーシップコース開催報告

金属労協組織総務局部長 上口 智子

2019年10月17日から11月2日まで、京都・関西セミナーハウスにおいて、第51回労働リーダーシップコースを開催した。北は新潟県から南は佐賀県まで総勢34名の受講生が研鑽に励んだ。以下、所見も交えながら報告する。

新たな第二步

労働リーダーシップコース(旧西日本)は、全人格的教育を目指し1969年に開校、昨年50周年を迎えた。2019年5月25日には学び舎である関西セミナーハウスで記念行事を開催した。金属労協結成当時の役員・関係者のご尽力で開校して以来、半世紀にわたって開催し続けて、この

50年間で1735名の修了生が巣立っていった。

そして2019年10月17日、新たな第一歩である第51回労働リーダーシップコースが開校した。今回は、受講生34名中女性が5名と、近年の中では人数が多い回となった。受講生で構成する実行委員会やゼミナールでも積極的に参加している姿に頼もしさを感じた。

開校式

―初めましての挨拶から

2019年10月17日(木)10時から開校式を行った。篠笛(森田玲・玲月流初代)の奏楽で始まり、式辞として香川孝三校長(神戸大学名誉教授)、松岡敬名誉校長(同志社大学学長)が、コースの意義を述べるとともに、受講生を激励した。また主催者代表挨拶として高倉金属労協議長が挨拶に立ち、「労働組合の存在

意義が問われている今、現実を踏まえたうえで我々の目指すべき目標に向かっていかに運動を展開していくのか、是非コース期間中に考えていただきたい」と述べた。その後、来賓として厚生労働省の山田政策立案総括審議官が挨拶に立ち自らの経験をもとに、「相手に対するリスベクトを忘れずに、切磋琢磨していただきたい。せっかくの合宿研修という場なので、明るく楽しく議論をぶつけ合っていたいただきたい」と激励された。次に第35回コースの修了生である山本一志関西ブロック代表が、続いて、石田光男副校長(同志社大学教授)が受講生を激励した。最後に受講生を代表してダイキン工業労働組合東京支部書記長の佐伯紗綾香さんが受講生宣誓を行い、開校式を終了した。

全く関係なく、同じ第51回生という立場で仲間づくりをしていたただくため、あえて自己紹介をする前に行う。開校式というセレモニーが終了したこともあり、少し緊張がほぐれ、これから2週間半寝食を共にする仲間として「初めまして」の挨拶を交わし合った。

日常生活―雨にも負けず

第51回の特徴は何と言っても「雨」。比較的天候に恵まれやすい10月ではあるが、今年は雨が多い毎日だった。朝7時15分には駐車場に集合して朝の挨拶、ラジオ体操、そして散歩が毎日の日課となっている。しかし、ラジオ体操の初日から雨。それからも雨の確立が高く、ラジオ体操は大会議室の中で、もちろん散歩は中止という日が続いた。大会議室でのラジオ体操の後には、雨に負けじと全員で「オー！」とこぼしを突き上げて気合



開校式で決意表明を読み上げる受講生代表



グループ形成(貿易ゲーム)
初めての共同作業。結果はどうだったかな？



実行委員会
皆さんのおかげで第51回は大変盛り上がりました。



坐禅体験
朝早くて眠かったけど、良い経験になりました。



お茶室体験
お茶を点ててみました。
上手に点てられました。



朝の体操
今日も雨が…。でも頑張ろう「オー！」



鞍馬山散策
雨の中頑張って登りました。



特別討論会 金属労協三役と語り合いました。

を入れる姿が見られた。

皆が楽しみにしていた「鞍馬山散策」も雨だった。雨が降りしきる中、互いに声を掛け合いながら鞍馬寺を目指した。お寺での講話では、昨年の台風被害状況などを聞き、自然災害の怖さ、自然の驚異を感じた。帰り道では傘もさせないほどの暴風雨に見舞われたが、皆元気に生還、すぐ入れられるように用意してあった大浴場で冷えた体を温めながら、互いの

健闘をたたえ合った。

休憩時間に大活躍したのは、第47回修了生から寄贈された卓球台。京都の街中からタクシーに乗っても20分以上かかるセミナーハウス。唯一の娯楽と言ってもいいのが「卓球」である。休憩時間、そして石田ゼミでは恒例の卓球大会が実施される。ほとんど卓球をやったことのない受講生も、コースが終わるころには何度もラリーを続けられるほど上達

していた。

また、最近はこの研修でもスマートフォンが大活躍。研修初日にはすでにLINEグループが複数登録され、実行委員会で決定した事項はただちにLINEでゼミ生に伝えられた。顔を合わせて伝えるべき内容については、実行委員がすぐにゼミ生を招集し、口頭で伝えられる。昨今はアナログとデジタル、両方のツールを駆使しながらコース運営がなされ

ている。

さまざまな特別プログラム

座学である講義の他にも様々な特別プログラムがある。結論を求めず自由に討論する場である「討論会」と金属労協三役と語り合う「特別討論会」。京都の自然に学ぶ「鞍馬山散策」やオプショナルプログラムの「比叡山登山」。日本の文化に触れる「坐禅」や「お茶室体験」。ここでは、ゼミナールと特別講演について紹介する。

①ゼミナール

ゼミナールでは「時代の求める労働組合の役割」を総合テーマに、労働組合・職場の課題を指導教授や受講生同士で解決案を探求する。5つのテーマに分かれて4回にわたり討議を重ねた。最後にはゼミナールごとにパワーポイントを使って発表を行い、成果を共有しあった。各ゼミナールのテーマと概要は次のとおり。

◎香川ゼミ

『労働組合と国際』 ～ 21世紀国際社会における労働組合の役割

「国際社会における日本の労働組合の役割」をサブテーマに、インダストリアルオール日本加盟組織の概要やインドアストリアルオールアクションプラン、国内外の労組における女性組合員・役

員比率や担当業務、特に欧州労働組合連合会と日本の組合役員比較などに焦点を当て分析するとともに、女性組合役員の活躍推進のためには何が必要なのか討議した。また、グローバル枠組み協定(GFA)の必要性についても討議した。

◎石田ゼミ

『労働組合と職場』～職場からの新たな雇用関係の構築

「労働組合の価値を高めるためには」をサブテーマに、各組織の諸課題を深掘し、多様化する時代に労働組合がどうあるべきか、労働組合の価値を高めるために何が必要とされているのか、討議した。

◎中田ゼミ



ゼミまとめ セミナールごとに発表。緊張しました。

『労働組合と社会』～仕事と処遇
納得性のある給与の決め方と水準

組織の賃金制度と水準を調査し、特性を把握、それぞれの組織の賃金制度の課題を分析するとともに各組織の賃金制度、処遇制度の提言について討議した。

◎上田ゼミ

『労働組合と企業』～企業社会の変貌と労働組合機能

「年休取得100%への挑戦」をサブテーマに、日本と各国の年休取得率を比較、さらに各労働の実態を比較、どうすれば年休取得100%が実現できるのか、年休取得100%にできるだけ近づける施策を阻害要因別に討議した。

◎寺井ゼミ

『労働組合と働き方』～ワーク・ライフ・バランスと労働組合の役割

各労働の多様な働き方に対する取り組み事例や年間総実労働時間の推移、実際に取り組みを取り入れた結果の成果や課題を分析するとともに、これからのワーク・ライフ・バランスの取り組みに必要なことについて、討議した。

②特別講演

経営者の方をお招きして実施している特別講演「経営と人間」は、経

営者ご自身の経験談、経営哲学や人生観、次世代への提言などを語っていただく場である。第1回の松下幸之助氏以降、日本のトップレベルの経営者の方に講義いただいている。

今回は、労働組合役員経験者でもある株式会社ダイセル取締役会長・札幌操氏を講師に迎え、労働役員経験から学んだこと、「人が変わることで組織も変わっていく。より新しいものができていく」という視点での人財を育てる意味などについて講義を受けた。講義の冒頭、自ら上着を脱いで「堅苦しいのはやめましょう」との声かけに、緊張した受講生も気持ちほぐれ、リラックスして聞くことができたようだった。受講生からは、「仕事に向かう姿勢など勉強になった」などと感想を寄せられた。

閉校式—また逢う日まで

2019年11月2日(土)朝から出発(たびだち)の集いを行い、受講生がコースを通して学んで感じたことを一人ひとりが述べ合った。その後、閉校式を行った。式辞として香川孝三校長(神戸大学名誉教授)が「この研修で得た一番の宝物は仲間との絆ではないか。合宿研修でより深まった関係を今後も継続していただきたい。」と激励し、34名全員に修了証



閉校式で答辞を読み上げる第51回級長

書を授与した。主催者代表挨拶として浅沼弘一金労協事務局局長が「今日がスタートである。この経験を職場に持ち帰って、この後の仕事に活かしていただきたい。」と述べた。その後、ゼミナール担当講師の石田副校長(同志社大学教授)、中田運営委員(同志社大学大学院教授)、上田運営委員(同志社大学教授)、寺井運営委員(同志社大学准教授)が修了生を激励した。受講生代表としての答辞では、第51回級長の神戸製鋼所労働組合神戸支部・藤原直大執行委員が14日間の思い出を語るとともに、「ここにいる仲間たちに出会えたことは大きな幸せです。それぞれの立場で自分が何をすべきかを考え、組合員

実行委員会

各ゼミナールから班長、副班長を各1名互選し、計10名で実行委員会を編成する。実行委員会の中から1名級長を互選する。コースは受講生の主体的な運営を基本とし、実行委員会がその中心となる。全体ミーティングで選出された第51回コースの実行委員会メンバーは次のとおり。

級長：藤原直大（神戸製鋼所労組神戸支部、石田ゼミ班長）
副級長：杉原明日美（基幹労連、香川ゼミ班長） 辺見吉譜（JFEスチール京浜労組、中田ゼミ班長）、福本和之（神戸製鋼所労組加古川支部、上田ゼミ班長）、森木田真一（パナソニックアプライアンス労組エアコン・コールドチェーン支部、寺井ゼミ班長）
委員：信高剛志（パナソニックホームズ労組、香川ゼミ副班長）、長田征士（パナソニックアプライアンス労組ホームアプライアンス支部、石田ゼミ副班長）、齋藤直哉（SUBARU労組、中田ゼミ副班長）、大西迪啓（シャープ労組東日本支部、上田ゼミ副班長）、高橋顕人（全労済労組関西支部大阪分会、寺井ゼミ副班長）

第51回労働リーダーシップコースを振り返って



労働リーダーシップコース校長
神戸大学・大阪女学院大学名誉教授
香川 孝三（かがわ・こうぞう）

第51回労働リーダーシップコースを振り返ってみると、女性の受講生の参加を気にしていたことに気づきました。34名中5名が女性で、2割を占めていました。最近では比較的に高い割合であった

ことから、開校式の校長としてのあいさつの中で女性役員の割合について話しましたし、同じく開校式で女性が決意表明をしたこと、香川ゼミでも女性の組合役員の割合を議論していたことを思い出します。開校式の前に連合総研編著『労働運動を切り拓くー女性たちによる軌跡』(旬報社、2018年10月)を読んでいたことや、日本ジェンダー学会代表理事を4年間勤めなければならなかったことが背景にありました。

ITUCは女性役員を4割まで上げていく方針をたてていますが、国際的にみても女性の組合役員の割合を示す統計が整備されておらず、国際比較できる対象国が少ないことも知りました。日本政府は女性の管理職の割合を3割まであげていく方針を示していますが、女性の組合役員の割合を上げていくことは一言も述べていません。この両方の割合は表裏一体であり、切り離すことはできません。

女性の参加率が高まることによって、リーダーシップの運営に違いがあったのかどうかはよくわからないのが正直なところですが、自然体で男女共同作業ができるようになってほしいものと思っています。

と家族の幸せの実現のために行動に移していきます。」と今後の決意を表明、「卒業の歌」を全員で合唱し、開校式を終えた。

つなごう次回、第52回へ

労働リーダーシップコース(旧西日本)の修了生は、通算1769名、旧東日本コース(第1〜40回)の939

名と合わせて、2708名となった。毎回、修了生は皆満足して帰ってくれただろうか、少しはその後の組合活動に役立っているだろうかと考える。2週間半の合宿研修は、スピードが求められる時代にあつて大変ぜいたくな研修ではないだろうか。是非この期間を、現在の活動をじっくり振り返る時間、見つめ直す時間

として使っていたきたい。運営側としても、合宿研修でしか得られない知識や経験を持ち帰ってもらえるよう工夫していきたい。次回、第52回コースは2020年10月22日(木)〜11月7日(土)の日程で開催する。第45回労働リーダーシップコースでは初の女性級長も誕生、次第に女性の

参加率も向上してきた。これからは金属産業でも女性労組役員が増えてくるだろう。是非今後も女性参加者が増えることを期待したい。そのためには、女性だけでなく全ての労組役員が参加しやすい環境づくりも考えていかなければならないと感じる。